

ISSN 2186 – 3989

外国学会発表報告

ISLH2018 – 国際法検査血液学会 2018 –

(the XXXIst International Symposium on Technical Innovations in
Laboratory Hematology)

2018年5月8日(火)～14日(月)ブリュッセル(ベルギー)

医療保健学部 小宮山 豊

北陸大学紀要
第47号(2019年9月)抜刷

外国学会発表報告

ISLH2018 ー国際法検査血液学会 2018ー

(the XXXIst International Symposium on Technical Innovations in
Laboratory Hematology)

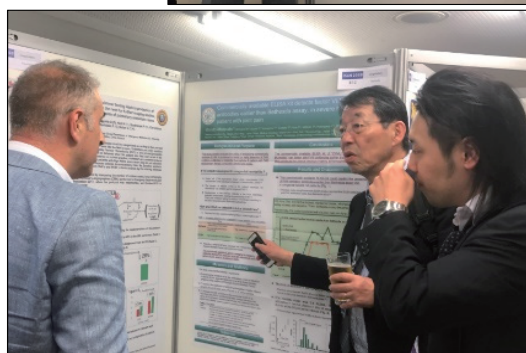
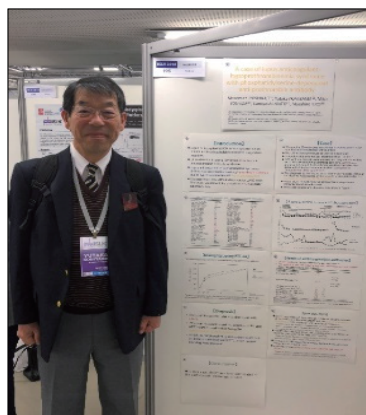
2018 年 5 月 8 日 (火) ~14 日 (月) ブリュッセル (ベルギー)

医療保健学部 小宮山 豊

発表題目：

1. Effect of centrifugation and microparticle-derived coagulation activity on routine coagulation tests.
2. Commercially available ELISA kit detects factor VIII inhibitory antibodies earlier than Bethesda assay, in severe hemophilia A patient with joint pain.
3. A case of lupus anticoagulant-hypoprothrombinemia syndrome with phosphatidylserine-dependent anti-prothrombin antibody.

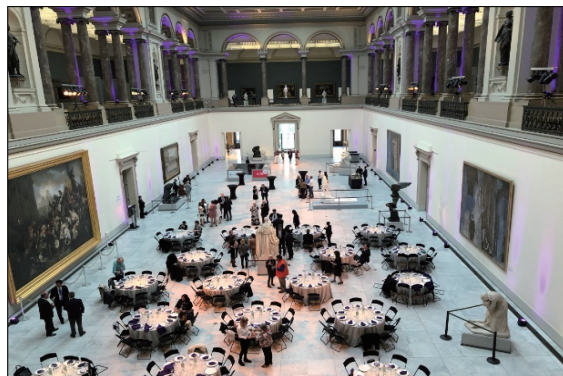
小宮山らの発表内容は以下のとおりで他大学や企業研究室との共同研究である。1 はシスメックス社との共同研究である血漿検体採取における遠心分離の血小板マイクロパーティクル出現への影響であり、欧米の先生方とともに本邦の先生方からも有用な検査システムであることの共感を得た。2 は新潟大学との共同研究で示した血友病患者における抗第 VIII 因子抗体検出システムの先天性患者への応用であり、多くの関心を引き、その有用性や感度、特異度を健常者のデータと比較して質疑に答えた。3 は、関西医科大学との共同研究で、本来血栓傾向を示すことが多いループスアンチコアグラント陽性の成人症例で明確な出血傾向を認め、重要な報告であるとの評価を得た。本学会で最も印象に残ったセッションは、オランダの Cate 先生の直接抗凝固薬 (DOACs) モニタリングに関する最近の知見である。必要事項は欧州の不整脈ガイドライン 2018 を参照としていた。なお、私の



印象としては彼がまとめた試薬会社の臨床データから見ると、血液凝固因子 Pharmacokinetics は安定しているが、実際の個人レベルで考えると相当不安定であるため、実際に出血や血栓の副作用が現れた場合は、迷わずに血中濃度をモニター（測定）する必要があると感じた。ということで、彼の DOACs を測定することは有用かとの問いに対する答えは、**Yes, Probably** であった。実際の問題症例の提示もあり、本学高学年では臨床検査の有用性を考えるうえで重要な指摘で教育に反映したい。

学会終了後、共同研究しているフランスの Hyphen Biomed

(HBM) 社を訪問した。HBM 社は止血系臨床検査試薬の研究開発会社である。同行し議論したのは、内科学の家子教授（北海道医療大学）、森山准教授（新潟大学）らと HBM の Amiral 顧問、Vissac 社長らで意見交換と共同研究続行を決定した。HBM 社内の研究設備見学では、たんぱく質科学の手法が実務として活用されていることに感激し、これからの臨床検査技師の職場として、臨床検査試薬研究開発会社も選択肢として大切と実感でき、本学の教育や就職に役立つ方向性の一つを見出した。



なお、学会主催のパーティーは、ブリュッセル市内中心部にある王立美術館内を開放して行われ、学会長はじめ各国から参加の先生方と親交を深めることができ、次回のバンクーバーでの再会を約束した。

余談であるが、ホテルから学会場への道を少し横にずれると、有名な小便小僧があると聞いたので行ってみると、驚くほど小さいもので、やはり本物を見て実感することは大切である。学会開催地のブリュッセルの町は治安もよく、料理、特にムール貝の料理とビールが素晴らしく、共同研究の先生方と楽しいひと時を過ごすことができ、今後への活力を得た素晴らしい体験であった。

今回は、本学の若い先生方と一緒に参加したいものである。

